

平和な世の中にするために

(原文)

染谷 春花 (13 歳)

茨城県

常総学院中学校

私たちが食べているチョコレートは甘いけれど、本当は苦い。私は、このことを社会の授業で知った。アフリカのガーナでは、まだ 10 歳ぐらいの子どもたちが朝から晩までカカオ農園で働いている。小学校にも行けずに、高さ 10 メートルもあるカカオの木に上ってカカオの実を収穫している。大人が木に上ると折れてしまうような細い枝に上っての作業は、落ちたら、命を落とすこともある危険な仕事だ。カカオを収穫する子どもたちは、チョコレートを食べたことがないと言っていた。私たちが「おいしい」と食べているチョコレートのために、命がけで働いている子どもたちが大勢いるということを知っているのだろうか。このような現状を踏まえて、近年、フェアトレードが行われている。自分たちの利益だけを考えるのではなくて、相手の国の人たちの生活も考えるという考え方だ。つまり、自分の側と相手の側の視点を二つ持って物事を考えるということなのだと思う。また、飢餓をなくす取り組みとして「テーブル・フォー・ツー」が行われている。飲食店や社員食堂で食事をすると、自動的にお金が途上国に寄付される仕組みだ。ただ見ているだけでなく、解決に向けて行動を起こしているのだ。SDGs にある「貧困をなくそう」「質の高い教育をみんなに」「平和と公平をすべての人に」などの目標は、まだ達成されていない。しかし、皆が自分の身近な世界だけを見るのではなく、広い視野を持つことで、世界は変わるのだと思う。そのためには、まず知ることが大切なのだと思う。

先日、学校で「爺さんの空」という劇を見た。特攻隊員の物語だ。特攻隊員になってしまった自分の子どもに「無事に帰って来てね。」と母親が震える声で言った。無事に帰れないと分かっているのに……。特攻隊員として亡くなった少年たちはどんなに辛かっただろう。特攻隊員で逃げ帰ってしまった人を、上官の人が殴る場面もあった。平和な国だと思っていた日本にもこんな残酷な時代があったのかと恐怖で震えた。最後に劇団員の方が、戦争の残酷さを伝えるために学校を訪ねて公演をしているのだと話してくださった。私は、実際に予科練平和記念館にも行ってみた。実際に残っている手紙や写真も展示してあって、生々しい戦争の事実を感じた。今まで知らなかった悲しい戦争の歴史に胸が苦しくなった。大人の都合で、国の都合で、せっかく生まれてきた命なのに、自分の命を輝かせることなく、亡くなっていく。戦争は、絶対にしてはいけないのだと思った。私たちは、戦争を「始めない」世界にすることが大切なのだと思う。

平和な世の中とは、皆が幸せを感じ、命を大切にし、笑いあうことのできる世の中なのだと考える。平和な世の中を作るために必要なことは、「知ること」だと思う。学校に行けない子どもたちのこと、食べ物が欲しくても食べ物がない子どもたちのこと、教育を受けることが許されない子どもたちのこと、世界で起こっている紛争のこと、自分の国で起こった戦争がどんなものだったかということ、地球環境のこと、ウクライナとロシアの戦争について。目をそむけたくなるような現実がある。私たちは、まだまだ知らなくてはいけない大切なことがたくさんある。一つ一つよく知って、目をそらさずに真剣に見つめて考えることが私にできる第一歩なのだと思う。そして、次にできることは、相手の立場に立って物事をとらえ、解決に向けて行動を起こすことだと思う。世界が、ガーナの子どもたちのためにフェアトレードを始めたように。チョコレートが本当の意味で甘くなるように、私たちの世界が本当の意味で溶け合うように私自身、学び考え続けていきたい。